過剰な時代の週末を刻した過激な作品

和光晴生

「天使の恍惚」は私が若松プロの演出助手となって初めて撮影現場についた作品だった。1971年の秋、「赤軍-PFLP・世界戦争宣言」(略称「赤-P」)上映後の赤バスが関西、九州方面向けに出発し、更にはあの時代最後の大規模な街頭闘争となった10・21「渋谷暴動」が起きた後に撮影が開始されていたと記憶する。敗戦60周年とか言われているが、その半分以上の歳月が経過している。よく憶えていないことが多いのも当然だろう。若松プロに入る前に、ATG「アートシアター新宿文化」の地下にあった「蠍座」でバイトをしていた当時のことは忘れていない。今で言う単館上映のはしりのような形で、若松孝二のみならず、足立正生、沖島勲ら若松プロの作品を度々上映していた文字通りのアングラの小劇場だった。

ATGの企画、制作担当者であった葛井欣士郎さんが「新宿文化」と「蠍座」との総支配人でもあったことから、「天使の恍惚」の企画の進行について、私はかなり早い段階から窺い知ることができていた。

足立正生が書きあげたシナリオ第一稿は、若松孝二がATG作品を撮ることをメジャーへのブレークとして多分に意識したものだった。70年代初めの熱く燃えていた当時の世相と、50年代に田舎から上京した若松孝二の下積み生活の日々とが、さながらフェリーニの『8 1/2』のように交錯する、シュールで不思議な世界が描かれていた。

葛井さんはこの第一稿をかなり気に入っていた様子だった。形としてはアングラの「蠍座」で作品が上映されていた監督が地上階のメインの「新宿文化」むけの作品を撮ることになっていた。予算面でなら300万円映画から1000万円の製作費への飛躍となる。内容的にも何かしら若松孝二のブレークを象徴するような作品が期待されていたのだ。

ところが、どうやら若松監督本人はこの第一稿には乗り気になれなかったようなのだ。変な半生記みたいなのは照れ臭い、今の時代、もっと戦闘的なハナシにしようよ、ということになったらしい。出来あがった第二稿には爆弾少年やら美少女やらが登場した。それでもまだ『8 1/2』のような混沌とした世界が展開されていた。この段階でキャスティング向けオーディションとかも始められていたのだが、シナリオ段階での詰めはまだまだ果たされていなかった。

この時点で、「映画批評」編集部から若松プロへと転出して来た、元「日大全共闘」芸闘委行動隊長との経歴を持つ岩淵進がシナリオ執筆に加わった。「赤-P」なんて過激なマニフェスト映画を作ったあとの劇映画第一作なのだから、もっと戦闘性をエスカレートさせようという方向に話は進んだ。折りしも、アラブからPFLPのメンバーが来日し、赤バスに合流しようとしたりする動きもあった。信濃町の畳部屋のホテルに籠もった足立、岩淵両人が書き上げた第三稿は、フランスの前時代のアナーキスト集団「四季協会」をモデルとした過激派組織が、米軍基地からの武器奪取や爆弾による都市ゲリラ戦を展開し、内部での路線対立、内ゲバから終末に至るという、かなりストレートな話に仕上がっていた。

本当のところ、葛井さんはこの第三稿にはいい顔をしていなかった。第一稿のいいところが消えてしまっている、とこぼしていた。

それでも時代は熱かった。まだ熱かった。若松監督以下、これで行けえーと突っ走る形で撮影が進められた。気が付いたらスタッフやエキストラに赤っぽいのやら黒っぽいのやら、全共闘・過激派そのまんまといった風情の人間が群れを成していた。

視覚効果の特撮会社に外注した爆発の瞬間のカットと、街なかで実写したパトカー、交番、国家議事堂なんかとを編集で直結モンタージュすると、爆弾闘争がジャンジャカ展開される絵柄が次から次へと出来あがった。

画面の中で、通りを走るパトカーが吹っ飛ばされ、渋谷の「ハチ公像」そばの交番や新宿三丁目の交番も爆破された。国会議事堂に爆弾を積んだ乗用車が突っ込んだ。音楽も、以前から過激なピアノぶっ叩き演奏でノリまくっていた山下洋輔トリオがスタジオ録音のみならず、映画の劇中にまで登場してライブを披露し、盛り上げた。

若松映画だから、ATGだろうがピンクだろうが関係なしに、セックス・シーンも過激なテンコ盛りとなった。試写の折り、トップ・シーンが始まったとたんに、川喜多かしこさんがそそくさと退散して行った。

撮影中からマスコミでも騒がれていた。公開前だったか後だったか定かではなくなっているのだが、映画の中で爆破されたことになっていた新宿三丁目の交番が、年末にクリスマスツリー入りのバッグに仕掛けられた爆弾で本当に吹っ飛ばされ、重傷者が出るという事件も起きた。「新宿文化」前から100メートルも離れていないところである。映画の公開中止か、との動きもあったようなのだが、何とか客入りも上々のうちにATGでの封切りは終わった。

そして1972年の年明け早々、連合赤軍による「あさま山荘銃撃戦」が起こり、続いて粛清・リンチによる同志殺害の発覚へと事が進み、60年代後半から続いていた熱い時代は一気に冷え込み、新左翼・全共闘・過激派たちの戦いには区切りが着いた。

私自身は当初、葛井さん同様、第一稿の若松版『8 1/2』とも言うべき脚本に魅力を感じたりしていたのだが、今思うと、あの時代にしか撮れない、そしてまた、あの局面で撮っておくべき作品として、あの第三稿があったのは確かである。あと1～2カ月遅かったなら、公開どころか製作に着手することも出来なかっただろう。過激派の闘いとその終末とを連合赤軍以前に呈

示しておいたところに『天使の恍惚』の意義がある。

なぜ、あの時代、日本のみならず、世界中が同時的に、ほぼ同質の闘いで燃えあがっていたのか、その時代背景を問うことなしに『天使の恍惚』を語ることは出来ないし、私自身の現在進行中の裁判を闘うことも出来ないのだ。

私事にわたって恐縮だが、私は『天使の恍惚』の劇中で米軍兵に射殺されるゲリラの役を務めている。他にも鹿島灘でロケした作品でヒーローに撲殺される暴力団員の役に駆り出されたりしている。若松プロといっても零細企業である以上、常駐の演出助手たるもの何でもやらねばならなかったのだが、これで厄落としが出来ていたのか、その後、私はアラブの地に赴き、映画ではない、ホンマモノの国際ゲリラ戦やらパレスチナ・コマンドの闘いへの参戦やらで、爆弾・空襲・砲撃・地上戦等々、何度も死線を越えるような経験を重ねて来ていながら、今もって生き長らえている。

おかげで、拘置所にある身で、若松孝二の最近の仕事ぶりを知ることもできている。『17歳の風景』といった、これまでの若松映画とは趣きの異なると思われる作品（実は『犯された白衣』に通底している?）も作られていて、その公開を機に、『天使の恍惚』をはじめとする若松作品の多くが回顧上映されているということも知った。これは単なる回顧には終わるまい。今の時代が逆照射されることとなる。日本国内が冷えていようが白けていようが、世界は燃え続けている。グローバリズムと言われて久しい。心すべし、「常在戦場」。

その上で、今改めて思うのだが、『天使の恍惚』第一稿にあったような、若松版『8 1/2』とも言うべき作品が、若松孝二本人によって撮られてもよい頃合いなのではないだろうか。もっとも若松孝二の場合、作品数が「8 1/2」どころか「100＋α」くらいになっているのだと思うのだが……。

それと、「帰国」以来5年以上経つというのに、子は作っても、今もって一本の作品も撮れていない、元だが現役だか不明の足立正生監督も、映画界復帰への「ミソギ」として、おのれが『8 1/2』的作品をまずもって作ってみるべきではないのか、という気がする。

今や塀の中を「持ち場」とする元演出助手としては、ここは一発、沖島勲作品の『出張』だったかの石橋蓮司よろしく、窓からゲンコツをふりあげ「みんな頑張れよ」と叫ぶしかない。

（わこう はるお　東京拘置所囚人）

若松孝二　フィルモグラフィ

1963	甘い罠
1963	激しい女たち
1963	お色気作戦　プレイガール
1964	悪のもだえ
1964	不倫のつぐない
1964	雌犬のかけ
1964	赤い犯行
1964	網の中の女
1964	逆情
1964	乾いた肌
1964	裸の影
1964	白い肌の脱出
1965	離婚屋稼業
1965	鉛の墓標
1965	情事の履歴書
1965	太陽のへそ
1965	冒涜の罠
1965	壁の中の秘事
1965	歪んだ関係
1965	欲望の血がしたたる
1965	愛のデザイン
1966	血は太陽よりも赤い
1966	引きさかれた情事
1966	胎児が密猟する時
1966	白の人造美女
1966	情欲の黒水仙
1967	網の中の暴行
1967	密通
1967	日本暴行暗黒史　異常者の血
1967	性の放浪
1967	性犯罪
1967	乱行
1967	続日本暴行暗黒史　暴虐魔
1967	犯された白衣
1968	腹貸し女
1968	肉体の欲求
1968	新日本暴行暗黒史　復讐鬼
1968	金瓶梅
1969	狂走情死考
1969	処女ゲバゲバ
1969	裸の銃弾
1969	現代性犯罪暗黒篇　通り魔告白記
1969	初夜の条件 ◆
1969	肉の標的　逃亡 ◆
1969	ゆけゆけ二度目の処女
1969	婚外情事 ◆
1969	現代好色伝　テロルの季節
1969	現代性犯罪絶叫篇　理由なき暴行
1970	愛のテクニック　カーマ・スートラ
1970	真昼の暴行劇
1970	新宿マッド
1970	性賊／セックスジャック
1970	日本暴行暗黒史　怨獣
1970	性輪廻（ヒグラマグラ）／死にたい女
1971	続愛のテクニック　愛の行為
1971	私は濡れている
1971	秘花
1971	性家族
1971	赤軍-PFLP・世界戦争宣言
1972	天使の恍惚
1972	現代日本暴行暗黒史
1972	性と愛の条件
1972	㊙女子高生　恍惚のアルバイト
1972	黒い獣欲
1973	㊙女子高生　課外サークル
1974	濡れた賽ノ目
1974	淫欲輪獣
1974	デルタの掟

□ 足立正生／あだち まさお [脚本、作詞、出演]
1939年生まれ。日大映研で『椀』(61)、『鎖陰』(63)を共同製作したのち、若松プロに参加する。『胎児が密猟する時』(66)、『セックスジャック』(70)など若松映画の脚本を量産する一方、『堕胎』(66)でピンク映画デビューを果たす。1971年、カンヌ映画祭の帰途でパレスチナへ向い、越境のニュースフィルム『赤軍－PFLP・世界戦争宣言』を制作し、74年、パレスチナ革命に身を投じる。97年、岡本公三、和光晴生らとレバノンで拘束され、2000年、日本へ強制送還される。監督作品に『銀河系』(67)、『性遊戯』(68)、『女学生ゲリラ』(69)、『略称・連続射殺魔』(69)、『15才の売春婦』(70)など。

□ 伊東英男／いとう ひでお [撮影]
1932年生まれ。東京映画に入社、三浦光男に師事し、フリーとなって以降、若松プロ作品のほとんどの撮影を手掛ける。ピンク映画を中心に300本近い作品に参加し、若松作品の他に、大島渚『愛のコリーダ』(74)など。97年死去。

□ 磯貝一／いそがい はじめ [照明]
1936年生まれ。『不倫のつぐない』(63)から『水のないプール』(82)まで、若松プロ作品のほとんどの照明を手掛ける。若松作品の他に、村野鐵太郎『男一匹ガキ大将』(71)など。84年死去。

□ 山下洋輔／やました ようすけ [音楽・ピアノ、出演]
1942年生まれ。69年、中村誠一、森下威男らと山下洋輔トリオを結成、83年に解散する。85年、山下洋輔ニューヨーク・トリオを結成。山下洋輔カルテット名義としては、相倉久人の監修のもと、『性犯罪』(67)、大和屋竺『荒野のダッチワイフ』(68)に音楽参加している。その他に、岡本喜八『ジャズ大名』(86)など。

□ 中村誠一／なかむら せいいち [音楽・ソプラノサックス、出演]
1947年生まれ。69年、山下洋輔トリオを結成、72年に脱退し、「ゲス・マイ・ファインズ」を結成する。

□ 森下威男／もりした・たけお [音楽・ドラムス、出演]
1945年生まれ。69年、山下洋輔トリオを結成、75年、三度目のヨーロッパツアーを終えて脱退、77年、森山威男カルテットを結成する。

□ 沖島勲／おきしま いさお [助監督]
1940年生まれ。日大映研で『椀』(61)『鎖陰』(63)を共同製作したのち、若松プロに参加する。『性の放浪』(67)などの脚本を担当し、『ニュージャック&ヴェティ』(69)でピンク映画デビューを果たす。監督作品に『出張』(89)、『したくて、したくて、たまらない女。』(96)、『YYK論争　永遠の"誤解"』(99)など。

□ 秋山ミチヲ（道男）／あきやま みちお [作曲、出演]
1948年生まれ。高校卒業と共に若松プロに参加し、助監督として、「音楽集団迷宮世界」名義などでの音楽、出演、ポスターデザインに到るまで活躍する。主演作に、『ゆけゆけ二度目の処女』(69)、『セックスジャック』(70)、音楽に、『処女ゲバゲバ』(69)、その後のプロデュース作品に鈴木清順『夢二』(91)など。

□ 中平卓馬／なかひら たくま [スチール]
1938年生まれ。68年、写真同人誌「PROVOKE」を創刊、ブレボケという方法論を生み出す。写真集に、70年『来るべき言葉のために』など。

□ 和光晴生／わこう はるお [撮影助手、出演]
1948年生まれ。慶応大学中退後、蠍座のアルバイトを経て、若松プロに参加する。『赤軍-PFLP・世界戦争宣言』(71)の上映隊、世界革命戦線情報センター結成に加わり、73年、パレスチナ革命に身を投じる。97年、レバノンで拘束され、2000年、日本へと強制送還される。現在、東京拘置所に収監され、裁判闘争中。

□ 岩淵進／いわぶち すすむ [制作主任、出演]
1945年生まれ。日本大学芸術学部闘争委員行動隊長ののち第二次「映画批評」、若松プロに参加。共同製作に『略称・連続射殺魔』(69)、出演に足立正生『噴出祈願/15才の売春婦』(70)など。

□ 葛井欣士郎／くずい きんしろう [制作]
1925年生まれ。51年、三和興行に入社し、61年、ATGのメイン劇場であるアートシアター新宿文化の支配人となる。65年、レイトショー上映や演劇上演を試み、67年、地下にアンダーグラウンド劇場の草分けとなる蠍座を設立、68年、作家とATGの共同出資による「一千万映画」の制作を担当し、数々の傑作を送り出す。